
天空和音！ キグルミオン！

境康隆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天空和音！ キグルミオン！

【Nコード】

N 6 1 4 5 Y

【作者名】

境康隆

【あらすじ】

なかのひとみ

仲埜瞳は、着ぐるみ大好き女子高生。愛称はヒトミ。着ぐるみに関しては、たぐいまれなセンスを発揮する元気少女。人類滅亡の危機と言われている宇宙怪獣襲撃の時代を明るく真っ直ぐ生きていたそんなヒトミはひょんなことから、宇宙怪獣に唯一立ち向かうことができるある兵器の操縦者となってしまう。フェルミオン。グルーオン。ダークマター。ダークエネルギー。瞳はよく分らない単語を聞かされながら、対宇宙怪獣用兵器——キグルミオンで立ち向かった。（『鎧袖一触！ キグルミオン！』の書き直しとなります）

プロローグ

天球は和音す――

ヨハネス・ケプラー（1571～1630）。数学者。天文学者。物理学者。

惑星――天球の軌道直径を導き出したケプラー。彼は惑星は和音を奏でていると信じた。

プロローグ

「天球は和音す。いい言葉だと思うわない？　惑星が音をつむぎだすのよ」

白衣の女性が夜空を見上げた。ややつり目がちの目をきりりと細め、不自然なまでに明るい満点の星空をその瞳に写し取る。

「元々は古代の哲学者ピタゴラスが、太陽系の星々の軌道を見て言い出したの。そして後に天動説を完全に否定したケプラーが、この考え方を引き継いでね。ケプラーは神秘主義に傾倒していた部分があつてね。哲学者にして、数学者にして、魔術師とも言われたピタゴラスの考えがとても気に入ったんじゃないかしら。それで惑星が和音を奏でるって考えたみたい」

白衣の女性はそのつり目がちな目をつむり、今度は耳を澄ませてみせる。まるで今まさにこの星空で奏でられている和音に耳を傾けたかのようだ。

「惑星が歌ってくれるのよ。私達が依って立つ世界である地球も含めてね。じゃあ宇宙は？　この世界そのものである天空は、どんな和音を奏でてくれのかしら？　私は天球和音という言葉思い出す度にそう思ってしまうわ。天空は和音しないのかしらってね。和音

で私達に語りかけてこないのかしらってね」

彼女はそのつり目をゆっくりと開け、静かに背後に振り返る。そこはビルの上だった。

都会のビルの上。夜半を過ぎた夜空とはとても思えない、奇妙なまでに明るい星空がその上空には広がっていた。

白衣の女性の後ろにいたのは、何処まで丸いフォルムを持つ人のような何かだった。

「ましてや、何かを私達に伝えるつもりじゃないのかしら——ってね」

白衣の女性は自問するかのように微笑んだ。

「宇宙は謎よ。謎だらけよ。私達物理学者はこの謎をダークだと呼んでいるわ。ダークマターに、ダークエネルギー。ダークフローとかね。それ以外にも、力の粒子であるグルーオンは未だ取り出せず、重力子も見つかっていない。ましてや重力波なんて本当にあるのかしら。超対称粒子は予想の域を出ないし、全てを説明してくれる万物の理論は私達の手にはまだまだ遠いわ。次元は十一次元かもしれないし、重力はその次元を漏れ出ているのかもしれない。不思議なことばかりでしょ？ 宇宙は謎だらけなのよ」

「……」

丸いフォルムは応えない。

「宇宙は何も教えてくれないわ。でも意地悪もしないのよ。あるがままにそこにあるだけ。ダークだと思ってしまうのは、私達の知識が足りないだけなのよ。宇宙はちゃんとそこにある。だから私達自身で解明するしかないの。そうね、今まさにこの地球に起こっているこの不思議から解き明かすべきかしら」

白衣の女性は天を見上げた。

そこには茨状の謎の発光体が、天空の端から端まで覆うように浮かび上がっていた。それはそれ自身が優しい曲線を描きながら、その端々にやはり優美な刺のような曲線を生やしている。全てが眩いばかりの光線だ。

ある者はそれを天に召しました救世主の茨の冠だと言う。ある者は聖母が祈りの為に瞑っている瞳だと言う。またある者は今正に、人類に天罰を食らわさんとしなりを上げている刺のムチだとも言っている。いずれにせよそれは誰にも何であるか理解できていない。ある日突然現れ、夜を昼のごとく明るく染めながらも何年も天に輝いていた。

そう今の星空は不自然な程明るい。それは地上の人工の光が満点の夜空を邪魔する以上に、その謎の発光体が天空で輝いているからだ。

「……」

丸いフォルムを持つ人のような何かが頷いた。

「いきましよう。私達ならそれが――」

白衣の女性は相手に応じて頷いた。

「そうよ。私達のキグルミオンなら、この世界を救うことができるわ」

そして力強く歩き出した。

一、鎧袖一触！ キグルミオン！ 1

「キヤー！」

悲鳴が上がった。

「誰か！ 子供が！」

それは悲痛な叫びだった。

夕闇迫る街中に、突如現れた巨大怪獣。

街を瓦礫の山と化し、人々を阿鼻叫喚の地獄に陥れた。

それは例えば母親の目の前で、年端もいかない子供を踏みつぶす

—
そついう地獄だ。

今まさに巨大な脚が、五、六歳と思しき少女に踏みつけられようとしていた。

悲鳴を上げたのはその少女の母親だ。母親は叫ぶことしかできない。彼女もまたこの巨大な脚が作り出した瓦礫に、その足首を挟まれていたからだ。

は虫類を思わせる四肢とその体躯。それでいて二足歩行。

強靱なアゴに並ぶ、凶暴凶悪な牙。

爪は破壊を呼び寄せるかのように、虚空を突いて鋭く伸びている。尻尾は巨大なムチだ。破壊の為に生えているかのような、骨と筋肉の固まりだ。

実際その禍々しい尻尾は、ふるう度にビル群を真ん中から二つに折ってしまっていた。

まさに怪獣としか呼びぶようのない異形の生命体。

それが街を、そして人々を壊していく。

手近なビルよりも大きいその異形の生物は、家屋程もある脚を持ち上げる。大人も子供も、この巨体からすれば同じに見えただろう。区別する意味すらないからだ。

目的も衝動もないのかもしれない。本能のままに、破壊できるも

のを破壊している。それだけのことなのかもしれない。

だから躊躇も何もない。

その怪獣が少女に脚を踏み下ろした、まさにその時――

「――ッ！」

一人の巨人が現れ、怪獣を蹴り飛ばした。

少女の頭上で、怪獣の脚が空を切る。

巨大な風がおこり、少女の全身をその突風が襲った。

怪獣が大地を転がり、地響きが人々の体を直接打ちつけたかのよう
に響き渡る。

突風を作り出した巨人は、怪獣にやや遅れて大地に降り立つ。

巨人は能面のように、それでいて菩薩像のような微笑みを浮かべた
仮面をかぶっていた。全身を包んでいるのは、その身にぴたりと
張りつく素材不明のスーツだ。

怪獣はすぐさま体勢を立て直した。本能だけを感じさせる赤く輝く
目を、突如現れた巨人に向ける。

巨人は身構える。その左足の後ろに、少女を匿うように身構える。
右足を後ろに引き、両手を手刀の形に構えて怪獣と相對する。

怪獣が大地を蹴った。その巨体で軽やかに前に出ると、巨人の体
に体当たりする。やはり地響きが湧き上がり、大地が揺れた。

巨体が二つぶつかった衝撃は、空気をも揺さぶる。まるで骨と内
臓で直接聞いたかのような衝撃音が、周囲を逃げ惑う人々に届けら
れた。

巨人はその場を動かない。左足に匿ったその少女の為に、その場
にとどまろうとする。

だがそれは無理があったようだ。

一歩も動かすまいと踏ん張ったその左足は、体当たりをきめた怪
獣の体を片足で支えてしまう。

巨人の脚はあり得ない方向に曲がった。

怪獣の全体重を乗せられて、左膝から下が関節とは逆の向きに曲
がる。

——ゴッ！

そう聞こえた鈍い音は、巨人の膝が砕けた音かもしれない。

巨人は右足を踏ん張り、更に左手をビルの屋上に突いて、己の体重と怪獣のそれに耐えようとする。

しかしビルは脆かった。巨人の左手は屋上から二、三階部分を打ち抜いて止まる。

バランスがとれない。怪獣はそのまま体重を預けてくる。

のしかかった際に背中に回された怪獣の腕は、容赦なくスーツに爪を食い込ませる。

左膝から伝わってくるのは、脚が千切れたかと思う程の衝撃だ。

ビルがまた崩れた。左手は更に屋内に埋もれていく。

怪獣の爪は増々背中に食い込んでくる。

そして怪獣の身は更にその重さを増し、無慈悲にも左足にのしかかる。

「——ッ！」

左足に走るのはやはり激痛だ。

それでも巨人は左足を動かさない。

今やふくらはぎに覆われる形となった少女が、まだその下にいるからだ。巨人は痛みに耐えて少女に首だけ振り返る。

陰に隠れた少女は、その巨人を見上げていた。

一歩も退かず。

まるで動ぜず。

微塵も怯えず——

ただひたすらに、尊敬の眼差しで巨人を少女は見上げていた。シヨーでも見るかのように。スクリーンにでも魅入るかのように。勸善懲惡の世界に、心奪われているかのように。

巨人はその少女と目が合う。

少女は花咲くように、一際大きく微笑んだ。

その瞬間——

「——ッ！」

巨人は怪獣と逆境を同時にはね除けた。

大地を揺らし、ビルを押し倒してその巨体が転がっていく。

巨人は立ち上がり、今一度少女に振り向いた。そして大きく頷く。少女が笑顔のまま頷き返した。

怪獣が夕日を背に立ち上がる。

巨人はもう一度身構える。まるで左膝が砕けたことなど、なかったかのように身構える。自分の背中にいることが、どれほど安全かを分からせるかのように身構える。

そう――

己を信じて疑わない――そんな瞳を向ける少女の為に。

一、鎧袖一触！ キグルミオン！ 2

それから十年後――

「止めなさい！」

己を信じて疑わない――そんな凜とした、それでいてくぐもった声が響き渡った。

そう、それはくぐもった声だった。何か空洞で反響するかのような少女の声が、それでいて力強く路地に響き渡った。

それは昇り始めたばかりの今日の陽射しにも負けない程、力強い意思の籠った強烈な声だった。

ここは繁華街。その路地裏。

華やかな表通りとは裏腹な、人氣がなく陽も差し込まない人生の裏街道――そんな場所だ。

生ゴミの匂いが鼻につき、湯気の熱気が皮膚にまとわりついた。路地を濡らす油が靴底を滑らし、煩雑に並べられたゴミ箱や自転車が衣服に引かかる。雑然としたビル谷間の谷間だ。

何となく脚を踏み入れるのを躊躇われる、社会の裏舞台のような場所だ。

だが――

「ああん！」

「止めなさいって、言ってるのよ！」

だがくぐもった声の主は、この路地裏の陰鬱な雰囲気には臆さないようだ。変わらずよく響く声で、相手を制止しようとしていた。

声の主はやはり少女のようだ。しかもまだ若い。声から察するに、まだ高校生ぐらいだろう。

「何じゃわりや？ 何のようじゃ？ 儂がどういうもんか、分かつんのか？」

そう、これもんで、それもんで、あれもんな感じの——その筋のお兄さんに、立ち向かっていいような歳には思えない。

裏地に龍の刺繍をした背広をはためかせ、その男は眉間にシワを寄せて振り返る。広い肩を怒らせ、脚を方々に投げ出すようにその少女らしき人物に近づく。

剃り上げた頭も、悪趣味な光沢を放つ足下の革靴も、そして胸に光る、時折ニユースで見かけるマークのバッチも——その全てが僅かな隙間から差し込んだ光に、威嚇するかのように反射していた。

その男の向こうには、怯えたように縮こまる男性が壁を背に震えていた。こちらは見るからに一般の会社員のようだ。

「あなたが何者かは知りません。ですがあなた方がぶつかっただのは、お互い様なのは私は見てました」

「あん！ 姉ちゃんよ！ あまりふざけた格好で、ふざけたことぬかすと——」

「姉ちゃんではありません！」

少女は相手に『ふざけた』と言われた格好で、ドンツと一つ前に出る。

大きな影が背後の繁華街の光を切り取っていた。確かにその影は少女のものにしては大き過ぎた。こんもりと路地裏の入り口を陣取っている。だが声は間違いなく少女のものだ。

「姉ちゃんじゃなきゃ、何だってんだ！ ああん！」

男の怒りは今にも頂点に達しようとしていた。

沸々と湧き上がる感情のままに、剃った頭の皮膚に血管が浮き出る。その血管が内で破裂でもしているかのように、男の顔は真っ赤だった。

歯は暴力の衝動を押さえるかのように噛み締められ、指先は今にも殴りかからんと内に折り込まれて震えていた。

それほどの怒りを買う程、少女の格好は人を——食っていた。

「私は——」

そう、なぜならその少女は——

「私はウサギのチャッピーです！」

ウサギの着ぐるみを着ていたからだ。

一、鎧袖一触！ キグルミオン！ 3

「こんなひどい時代に、暢気なものね。一般市民の皆様は」

少々つり目の目尻を怪訝に細め、白衣の女性が眉をひそめた。そのまま目をつむり、手に持っていたカップに口をつける。

彼女は窓際に腰掛けていた。窓から他のビルの屋上部分が見取れる。その景色から、彼女のいる部屋が中高層の建物の一室であることがうかがい知れた。

「いい匂いに、いい色。フレーバーやカラーも、やっぱり物理的な現象よね」

白衣の女性は一口カップの中身を口に含ませるや、ほうとため息を吐き出しながら呟いた。

カップから立ち上がる湯気が、狭い室内に立ち上がっては直ぐに消えていく。

普通の事務所ように見える。事務机があり、ロッカーが壁際に並べられている。狭いと言っても五人は配置できそうなそのスペースに、今は二人だけがその部屋にいた。

己の手元から立ち上がる湯気をしばらく目で追い、白衣の女性は目を窓の向こう——そのガラス越しの路上に目をやった。

眼下では何やら人ごみができており、人目で騒ぎが起きているのが見て取れた。

何しろ繁華街の路地裏を覗き込むように、それでいながらなるべく近づくまいとしているように、同心円状に人の山ができたからだ。

「ふふん……家から持ってきた……博士の為に……」

情報端末から片時も手を離さず、一人の少女が小声で応えた。女子高生らしき制服を着ており、何処か眠たげな視線をモニターに向けていた。

少女はイスに寄りかかって座りながら、片手にもった情報端末に

もう片方の指を一時の迷いもなくは知らせていた。

「ありがとうね。さて、一般市民様の喧噪でも見ながら——ん？」
「何……」

端末を操作する女子高生は、やはり眠たげに、その上興味もなさそうに間の手だけを入れる。その間一瞬たりとも指の動きは止まらなかった。

「凄いわ。ウサギがこれもんな人に、立ちはだかっているわ」

「ウサギ——ッ？ 何処！」

女子高生がガタツとイスから立ち上がる。情報端末を片手に、その少女は慌てて窓際まで走っていく。眠たげな視線はそのままに、ウサギを一目見んとか、体だけは飛ぶように窓際に向かった。

その際垣間見えた情報端末の中には、ぬいぐるみを模したと思しき動物のキャラクター達がいた。性格には動物を擬人化したぬいぐるみのキャラクター達だ。

そしてその端末が揺れるに合わせて、まるでその中に本当にいるかのように、ぬいぐるみ達は方々に転がり慌てふためいていた。わざとらしく、何処か楽しげだ。

「あれよ」

白衣の女性が顎で眼下の光景を指し示す。その視線の先——ビルの谷間では、ウサギの着ぐるみが右に左にと大立ち回りを演じていた。相手の繰り出す拳を、その巨大な頭部にもかかわらず紙一重でかわしているのだ。

「どれ？ ぬぬ？ ウサギの着ぐるみ……小汚いけど、かわいい……」

「あはは。あんなかわいいナリで、それもんの人に立ち向かっちゃダメよね」

「むむ……それは、私達も同じ……」
「そうね。ま、一度も実績がないけど」

白衣の女性はもう興味をなくしたのか、それともその話題に触れたくないのか、すつと眼下から目を離し、カップに再度を唇をもつ

ていった。

「博士……あのウサギ、スカウトしよ……あのウサギならやってくれるかも……」

「何言つてんの、美佳^{みか}ちゃん。？アレ？は私達だけでどうにかする。そう決めたでしょ？それに、アレは普通の人間で無理。だから美佳ちゃん達に頑張ってもらってるんでしょ？」

「ぐぐ……」

美佳と呼ばれた眠たげな少女は、窓の下のウサギの動きに目を釘付けにされたまま唸った。

「期待してるわよ」

白衣の女性が微笑んで美佳の方に目を向ける。窓に張りついたままの美佳とは目が合わず、彼女はそのまま美佳が持っていた情報端末のモニターに目を転じた。

モニターの中から数体のぬいぐるみのキャラクターが、まるで博士の視線と声に応えたかのように手を振り返した。

その時――

「――ッ！」

耳をつんざく不快な音とともに、室内が真っ赤に照らされた。

美佳がビクツと驚き、とっさに情報端末を抱き締めた。

「警報！ まさか？ ついに来たの！」

白衣の女性はとっさに窓から、空を見上げた。いや、彼女は空よりもっと上を見ていたのかもしれない。

何故なら――

「宇宙怪獣……」

空よりももっと遙か彼方からやってくる、人類滅亡の脅威の名を呟いたからだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6145y/>

天空和音！ キグルミオン！

2011年12月2日18時50分発行